

――〇二〇年の東京オリンピック・パラリンピックの諸施設建設をめぐって、たびたび耳にした言葉が「レガシー(遺産)」であった。オリンピック憲章そのもののレガシー性については、それが別々に建築という存在に限れば、「遺産としての建築」ということになろう。しかし、「遺産としての建築」とは、そもそもどういうことなのだろう。

それは、単に何かが行われたという歴史の痕跡を示すための遺跡のことではない。人々の、その出来事と密接に関わった集合的記憶と結びついているものはずである。フランスの歴史学者ピエール・ノラの言葉を借りて「記憶の場」と呼んでもいい。記憶を留めるための拠り所となるという点では、モニュメント(記念建造物)的な役割も果たすといえる。「記憶の場」であるためには、モニュメンタルな強い存在感が必要なのも確かだからだ。

しかし、モニュメントは、その出来事に関わったものではない。一方、建築は、実際に使われた場であり、「生きた場」である。建築には、人々の「生きた記憶」が宿り、その生々しさこそが、「レガシー」や「記憶の場」としての力である。一九三六年のベルリンオリンピックの今も残るメイン・スタジアムは、ナチズムの歴史を現在の問題としても意識させ、人々に忘れさせないための遺産でもあるだろう。

各 人 各 説

記憶の場としての建築

芦原義信建築アーカイブ展に携わって

武蔵野美術大学 造形学部 教授

田中正之

Masayuki Tanaka



一九六四年の東京オリンピックのメイン・スタジアムは消え失せ、六〇年代以降の日本の歴史を濃密に象徴する「記憶の場」のひとつが無くなったのは、なんとも残念であった。

今年、銀座のソニービルも解体されることになり、話題となった。銀座という場の歴史のみならず、日本の戦後の発展やモダニズム建築史をも記憶する場が失われてしまった。

縁あって、ソニービルの設計者である芦原義信氏の建築関連資料をアーカイブ化する作業にここ数年携わり、その成果を今年、武蔵野美術大学美術館において展覧会の形で発表させてもらった。六〇年代の芦原さんの建築作品を中心に、設計図面や写真、模型などの諸資料を展示し、デジタル化した建築図面のデータベースをディスプレイ画面で操作できるようにもした。

確かに建築そのものがどのようなであったのかは、諸資料を丁寧に整理分類し、デジタル画像化することによって体系的にアーカイブ化できる。それによって、当初の設計思想などを知るための研究に活用するのにも可能となる。

ただ、その建築が人々によって、どのように体験され、生きたのかは、どうにもアーカイブ化が難しい。そのためには、設計者である建築家ではなく、使用者の側の視点に立ったアーカイブ化も必要なのだろう。失われた建築を生きた記憶や歴史とともに記録として残していくのは、それほど簡単ではないようだ。